

遊漁者による消費活動は、地域の活性化にも貢献しており、誘客が重要です。漁協では、遊漁者の新規獲得に向け、栃木県内水面漁業振興基金を活用し、インストラクターによる釣り教室の開催や釣り具のレンタルなどの取組を行っているところもあります。また、女性の遊漁料の半額化、中学生以下の遊漁料の無料化なども実施されています。

近年、溪流釣りや河川中流域・湖沼でのルアー釣りは若い遊漁者に人気があり、遊漁者の新規獲得の一つのツールとして期待されています。

遊漁者については、他県への流出に加え、少子高齢化の進行やレジャーの多様化に伴う減少もあり、若者や女性の新規参入など、いかに遊漁者を増やしていくかが求められています。

また、アユの漁期以外の期間では、利用者数が大きく減少する河川漁場が多いことから、年間を通じた賑わいのある漁場の回復が課題となっています。

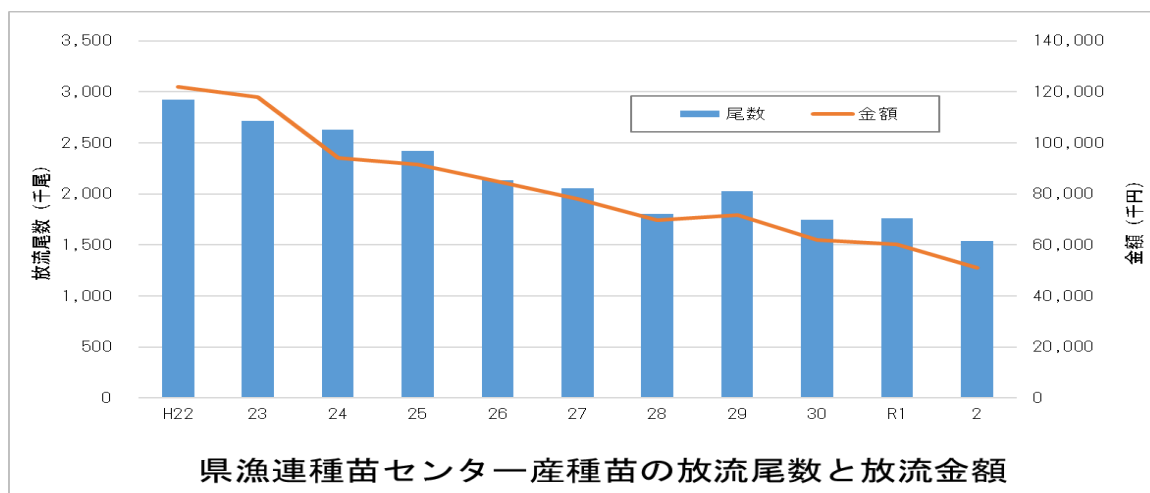


③ 放流の状況

漁協は、漁業法に基づき、河川・湖沼への魚類の産卵場造成や種苗放流などの増殖事業を行っています。これは、海面と比べて内水面は資源量が限られており、増殖・放流を行わなければ成り立たないためです。

漁協の増殖事業経費は、漁業料や遊漁料収入が主な原資となっていますが、組合員や遊漁者の減少による収入減により、放流量は年々減少しています。

河川への放流量が減ると、釣果の低下などから本県を訪れる遊漁者が減少し、さらなる漁協収入の減少につながる悪循環（負のスパイラル）に陥ることとなります。

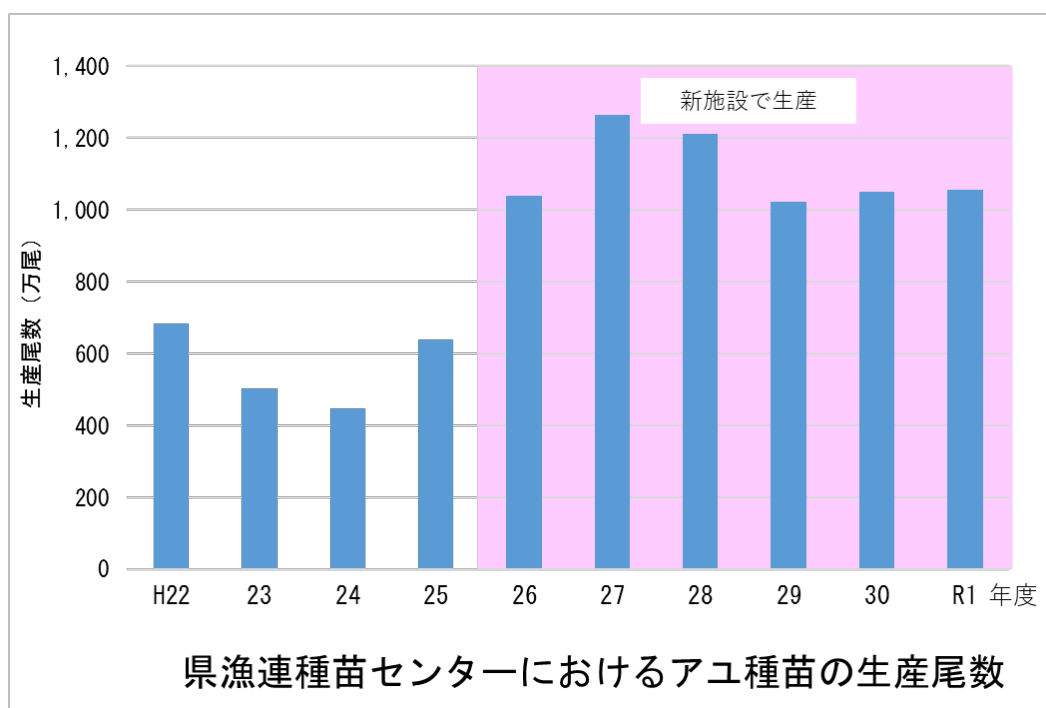


④ 県産アユ種苗の生産

県内のアユ放流種苗は、栃木県漁業協同組合連合会（以下「県漁連」という。）種苗センターが生産し、会員漁協へ安定供給する役割を担っています。平成26年2月、種苗センターは規模を拡大し、下野市に移転整備されました。

新施設では、旧施設での生産尾数 500～700 万尾を上回る 1,000 万尾の生産供給が可能となりました。

しかし、各漁協の放流量が年々減少するなど、需要量と供給可能量が大きく乖離しています。



県漁連種苗センター

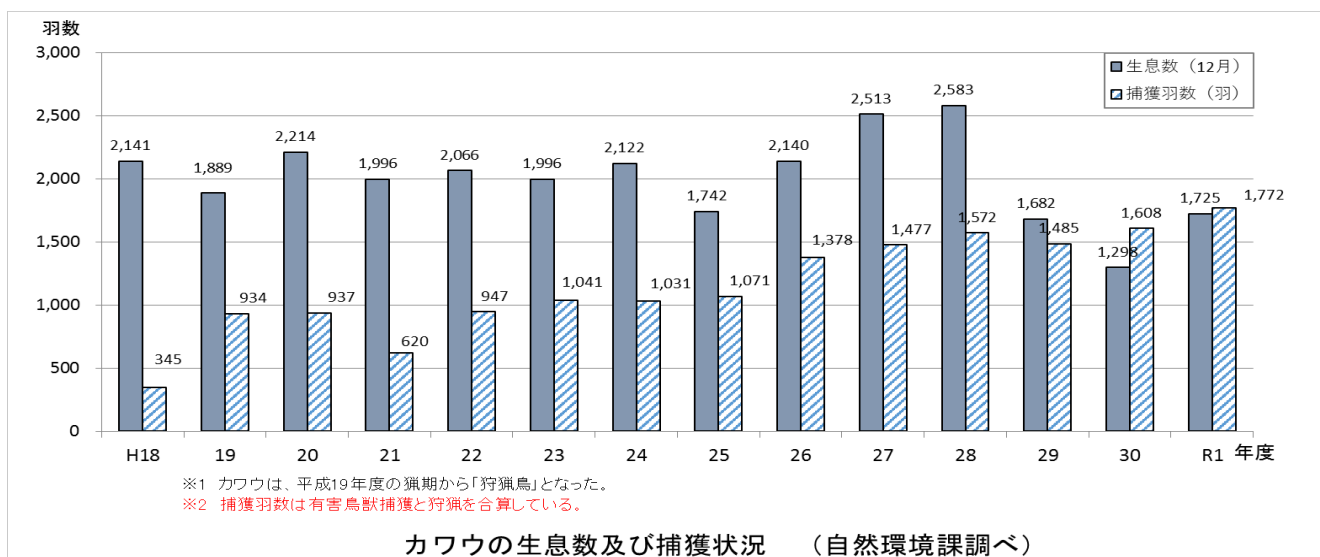


生産されたアユ種苗

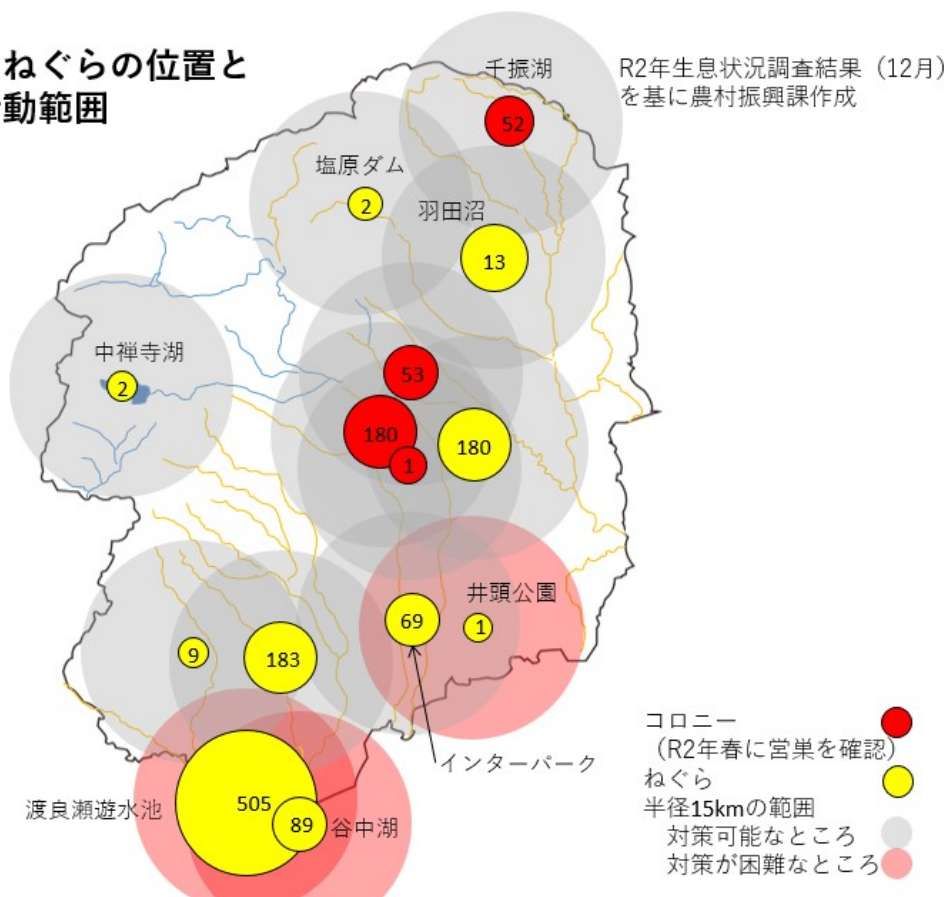
⑤ カワウ、コクチバスによる被害

各地でカワウによる水産資源の食害が問題となっています。県内では毎年、漁協が約 1,500 羽程度の駆除を行っていますが、それでも 1,000 羽以上の生息が確認されています。

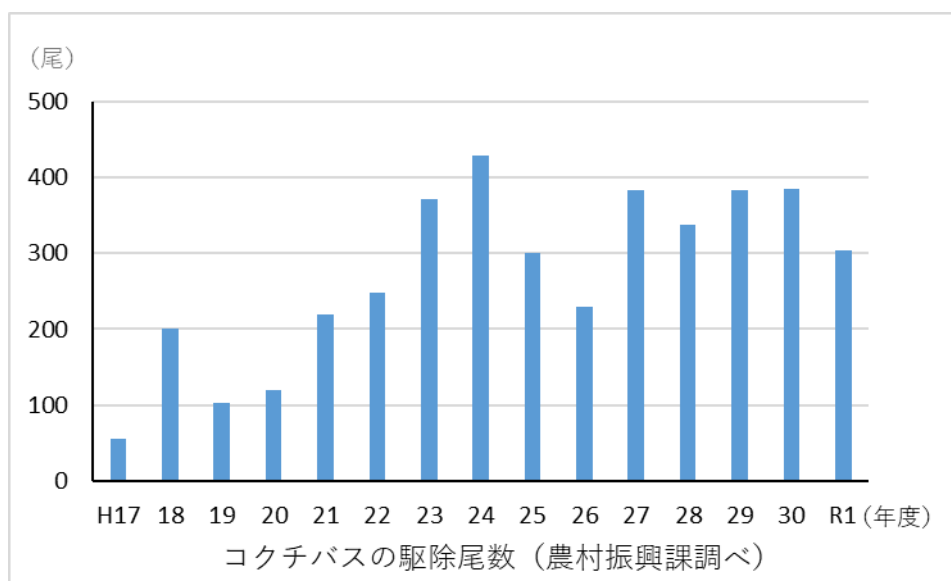
カワウによる捕食額は、平成 29 年度で 3 億 3,500 万円（うちアユ 6,500 万円）と推計されています。



コロニー・ねぐらの位置とカワウの行動範囲



特定外来生物に指定されているコクチバスは魚食性が強く、アユをはじめとする水産資源の食害が確認されています。現在では、県内の河川の全域に生息域を拡大しており、その対策が喫緊の課題となっています。



○ アメリカミンクによる被害の懸念

2018年度以降、那珂川流域北部において特定外来生物アメリカミンクの生息が確認されています。今後、個体数の増加等が起きれば、水産資源の食害の恐れがあります。



アメリカミンク
(那珂川町小口)

⑥ 漁場における疾病の発生

アユ漁場では、冷水病やエドワジエラ・イクタルリ感染症が発生し、へい死による資源量の減少や罹患したアユの活性低下による不漁が問題となっています。

コイでは、致死率の高いコイヘルペスウイルス病の発生が問題となっており、本県においても平成15年度に初めて確認されて以来、これまでに28件の発病が確認されています。

⑦ 漁場環境・水域生態系の変化

河川・湖沼の水質は、環境基準の遵守に向けた啓発や監視態勢の強化により概ね良好な状況が保たれています。

魚類の生息域を分断し、アユ、サケ等を始めとする魚介類の遡上や降河などの移動を阻害する堰堤等の河川横断施設については、魚道の新設や古い魚道の機能回復による縦断的な生息環境保全につながる改修が順次進められています。

また、農業用水路等においても生態系に配慮した工法等（※）が取り入れられ、繁殖・生育の場として、魚類の棲みやすい水域環境づくりが進められています。

ミヤコタナゴは国内希少野生動植物種及び国の天然記念物にも指定されており、その生息地は本県と千葉県のごく限られた水域のみとなっていることから、生息区域における水域環境の負荷を回避・軽減することが重要であり、関係機関と地域住民による生息環境改善の努力が続けられています。

（※）生態系配慮工法：当該地域の生物多様性を守るため、生態系の保全に努め、環境への影響を最小限に抑えながら、魚の生息や移動を手助けできる簡易魚道の設置やワンド等の造成などの工法を施すこと。

(2) 養殖漁業

① 養殖生産

本県の養殖業では主にアユやマス類が生産され、令和元年の生産量はアユ 310 t (全国 4 位)、ニジマス 284 t (全国 5 位) と全国上位に位置しています。

地域特産魚として生産拡大に取り組んでいる「ヤシオマス」の令和元年の出荷量は食用 115 t (前年 82 t)、釣り堀用 13 t (前年 11 t) でした。

養殖生産量は、福島第一原子力発電所事故の影響により平成 23 年に大きく減少し、その後も以前の水準には戻っていません。

